

**演題名 薬物依存からの脱却！～チームによる安定した透析の提供～**

**施設名 医療法人社団茅ヶ崎セントラルクリニック**

**発表者** ○成田朋子(看護師)、細川康子(看護師)、宮田由美子(看護師)、小田島英明(臨床工  
技士)、前田朋子(看護助手)、神代慶子(薬剤師)、佐野敦子(管理栄養士)、阿部重一(医  
師)

**概要**

**【はじめに】**

薬物依存症を持つ透析歴11年の患者に対し、チームとして薬物依存からの改善に取り組み、現在は安定した透析生活を送っている症例について報告する。

**【症例紹介】**

患者：A氏(53歳) 男性

家族構成：母親(キーパーソン)と同居

疾患名：糖尿病性腎症

高血圧症

糖尿病性網膜症

緊張型頭痛

既往歴：外傷性くも膜下出血、左鎖骨下骨折

現病歴：平成8年から糖尿病で茅ヶ崎市立病院へ通院。平成19年にCr7.5mg/dl。尿毒症状認めシャント造設。同年透析開始し、維持透析目的で当院へ転院。

性格：几帳面

神経質

**【治療(ケア)計画】**

以下3点、①週3回の通院を確実に出来る、②検査データを改善させ、本人の自信に繋げる、③安定剤に頼らない生活を送ることを目標とし、各職種がチームとなり、①処方目的での他科受診をさせないよう、家族による監督、薬物管理の徹底本人への意識づけの為、薬剤師と密な連携による繰り返しの説明、②落ち着かせるよう安心感を心掛けた積極的なコミュニケーションの継続、③穿刺困難にて、穿刺に対する恐怖心を最小限にするため穿刺ミスが少ないスタッフから始める、④他部署、特に栄養士との連絡、連携を図り数値改善を図る、以上4つの計画に基づいてアプローチしていく

**【経過】**

薬剤に関して、毎回透析時に飲み切りだけを渡し、飲み終わった事を確認してから次を処方することとし、本人への意識付けを図るようにした。時折患者より「内服薬が紛失したから余分に欲しい」との訴えがある場合は、訴えを尊重し少量のみ処方。患者は決められた量を認識し、思いを受け入れてくれるという安心感につながっている。スタッフとの信頼

関係を築きはじめ、徐々に職員の言葉を受け入れるようになってきた。自立心を創出する為、医師[全管理]、看護師[改善点に着目し良好な事を伝える。どんな言葉にも耳を傾け、無理強いしないコミュニケーションと納得するまで指導]、技士[透析条件の設定]、看護助手[食事時など家族的な言葉掛け]、薬剤師[確実な内服の為、薬の分包化と手渡し]、栄養士[改善した点をふまえながらの栄養指導]を行った。患者本人の自信につながり、食事・水分のコントロールが図れるようになり安定した透析に繋がりはじめた。

**【結果】**

当クリニックでチームとして取り組み、体重が当初の49.0kgから60.3kgと改善した。体重が増えたにもかかわらず、HbA1cは10.1から5.8と改善された。DW(※)はご本人の努力もあり、管理が良好で、中1日で1.8kg前後、中2日で2.8kg前後に守られている。週3回の通院が可能となり、攻撃的な態度がなくなり、スタッフや他の患者とも会話が多くなり、笑顔が増えた※DWとは患者の心胸比がおおよそ50%以下とし、血圧変動や下肢などの筋痙攣の症状がない状態である適正体重の事、体重コントロールは通常、中1日でDWの3%以下、中2日で5%以下を目標としている。

**【考察】**

一日おきに通院が必要な透析生活は、食事・水分制限だけでなく、生活や生き方も制約があり、ストレスとなる。当クリニックは外来の為、生活背景を理解した上で、その人らしい生活を送れるようセルフケアマネジメントをする事が求められる。精神疾患があっても、当クリニック特有の家族的な温かい対応と各職種がチームとなり根気よく食事指導し改善した。特に薬剤への依存を解消したことが安心感の醸成につながり、安定した透析を提供出来るようになったと考えられる。今後も患者個々の状況にあったチーム透析医療を見出し、どのような状況でもその人らしい生き活きとした人生を支援していきたい